

題材「行きたい国」に世界遺産を取り入れた外国語活動の授業実践事例

石 濱 博 之*・染 谷 藤 重**

(平成25年9月30日受付；平成25年11月5日受理)

要 旨

2011年度から小学校外国語活動が必修化された。学習指導要領外国語活動編のねらいでは、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」こととなっている。そのねらいを遂行するために、小学校外国語活動の教材『Hi, friends!1・2』が平成24年度4月より全国の国公立の小学校に文部科学省著作物として配布された。具体的に、原則として5年生用に『Hi, friends!1』、及び6年生用に『Hi, friends!2』が使用されている。『Hi, friends!2』のLesson5には題材“Let's go to Italy.”が取り上げられている。その授業実践では、外国に行くことに焦点をあてて世界遺産を取り入れながら、おのおのの児童に「行きたい国」を表現させようと試みている。児童の自己評価によるコミュニケーションしようとする態度の変容から授業の指導のあり方を検討した。検討した結果、児童が「行きたい国」を話せたとみなした。児童が相手におのおの「行きたい国」を表現するために、授業の中で「聞くこと」から「話すこと」をめざすような指導方法を組み立てていった。その結果、最終的に児童が自信を持って表現したのである。

KEY WORDS

Foreign Language Activities	外国語活動	Topics	題材
the Countries We Want to Visit	行きたい国	World Heritage Sites	世界遺産
Children's Self-Evaluation	児童の自己評価		

1 はじめに

2011年度から小学校外国語活動が必修化された。学習指導要領外国語活動編のねらいは、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」こととなっている。そして、次の3つの柱から構成されている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

このねらいを遂行するために、小学校外国語活動の教材『Hi, friends!1・2』が平成24年度4月より全国の国公立の小学校に文部科学省著作物として配布された。そこで、具体的に原則として5年生用に『Hi, friends!1』、及び6年生用に『Hi, friends!2』が使用されている。『Hi, friends!1』は9つの単元で構成されており、『Hi, friends!2』は8つの単元で構成されている。その『Hi, friends!2』の8つの単元構成の中で、Lesson5は“Let's go to Italy.”となっており、児童が「行きたい国」を自己表現することができる。その際、『Hi, friends!2』に世界遺産を導入して、より世界を身近な話題として取り扱おうとする意図がある。

本稿では、『Hi, friends!2』のLesson5の題材“Let's go to Italy.”の授業実践で、世界遺産を取り入れながら最終的に児童が「行きたい国」を自己表現できるような指導の方法を提案するものである。

2 糸魚川市立Ⅰ小学校での世界遺産を取り入れた授業実践の取り組み

2.1 『Hi, friends!2』のLesson5の題材“Let's go to Italy.”の単元目標とその内容

2.1.1 『Hi, friends!2』のLesson5“Let's go to Italy.”の単元目標

前述したとおり、6年生用の『Hi, friends!2』は8つの単元で構成されている。その中で、“Let's go to Italy.”は5つ目の単元である。『Hi, friends!2 指導編』（2012）によれば、その単元目標は、「自分の思いがはっきり伝わるように、おすすめの数国について発表したり、友達の発表を積極的に聞いたりしようとする。行きたい国について尋ねたり言ったりする発表に慣れ親しむ。世界に様々な人たちが様々な生活をしていることに気付く。」となっている。そして、この単元では、海外のことに詳しいさくらの祖母（すずききよこ）がゲストティーチャーとしてさくらの学級にやって来るという設定となっている。

2.1.2 『Hi, friends!2』のLesson5の題材“Let's go to Italy.”に示された具体的な内容

表1の示すとおり、『Hi, friends!2』とその指導編から、この単元の活動は7つの活動を取り入れて、具体的にやり方を示している。

表1 Lesson5の具体的な内容

活動	やること	その内容
Let's Play 1	()に国名を書こう。	・知っている国を発表し、音声を聞いて()に国名を書く。
Let's Listen 1	どの国の世界遺産か、考えよう。	・世界遺産を説明する音声を聞き、どの国の何という世界遺産かを聞き取る。
Let's Play 2	「国歌クイズ」を作ろう。	・さくらの祖母が出題する国旗クイズに答え、クイズの作り方を知る。その後、グループで相談して国旗クイズを作る。
Let's Play 3	友だちに行きたい国をインタビューしよう。	・友達と行きたい国とその理由について尋ね合う。
Let's Listen 2	わかったことを書こう。	・さくらの祖母が、フランスについて説明する音声を聞き、わかったことを枠内に書く。
Let's Chant	Let's go to Italy.	・チャンツを何度も言うことで、“I want to ~.”の表現に慣れ親しませる。
Activity	おすすめの数国を紹介しよう。	・さくらとひかるのおすすめの数国の紹介を聞いて、わかったことを枠内に書き、自分のおすすめの数国を紹介する。

2.2 糸魚川市立Ⅰ小学校での Lesson5の題材“Let's go to Italy.”の授業実践

2.2.1 その単元目標

「自分の思いがはっきり伝わるように、おすすめの数国について発表したり、友達の発表を積極的に聞いたりしようとする。行きたい国について尋ねたり言ったりする発表に慣れ親しむ。世界の様々な人たちが様々な生活をしていることに気付く。」という単元目標を基にした。更に、単元目標のねらいは、児童が実際に言ってみようという国を「言ってみること（表現してみること）」とした。

2.2.2 話題と本実践のねらい

本単元の話は、「行きたい国はどこですか」とした。そして、おのおのの児童が世界遺産を想定しながら行ってみようという国を表現してみることとした。表現する（言ってみよう）ために、電子ボードで『Hi, friends!2』のLesson5“Let's go to Italy.”で取り上げられている世界遺産の画像を提示した。

そのねらいは、具体的に5つとした。

1. 英語に親しむ。
2. 英語でコミュニケーションをする態度を育成する。
3. 「聞くこと」と「話すこと」を促す。
4. 行きたい国を発表しよう。
5. 行きたい国の文化について知ろう。

2.2.3 単元構成

この単元は4時間で構成した。4時間構成の中で、スキル面では「聞くこと」から「話すこと」を促すような活動

を導入した。そして、世界遺産をより身近に体験させるために、第3時に世界遺産の画像を導入した。その世界遺産を想定しながら「行きたい国」を考えさせ、第4時で児童に行きたい国を発表させた。具体的に、第1時から第4時までは次のようである。

- 第1時： 行きたい国はどこですか（「聞くこと」を中心）
- 第2時： 行きたい国はどこですか（「聞くこと」と「話すこと」を中心）
- 第3時： 世界遺産を知ろう（「聞くこと」と「話すこと」を中心）
- 第4時： 行きたい国を発表しよう（「話すこと」を中心）

2.2.4 文型および新出単語など

単元の4時間目で児童に発表させるために、(1)文型、(2)単語、及び(3)世界遺産の名称を積み上げながら提示した。特に、(1)の文型は、4時間構成の中で指導の時間の経過と共に文型の表現の強調点をかえている。

(1) 文型：

What country is it?

It's France.



Where do you want to go?

I want to go to France.



Where do you want to go?

I want to go to France.

Why?

I want to see the Eiffel Tower.

(2) 単語：

where, do, you, want, to, go, I, Japan, China, France, Australia, UK, India, Russia, Germany, Brazil, Canada, Italy, Korea, Spain, Egypt, Switzerland, Thailand, Argentina, Nepal, New Zealand, Singapore

(3) 世界遺産：

Ayers Rock (Australia), Canadian Rocky Mountain Parks (Canada), Changdeokgung Palace Complex (Korea), Cologne Cathedral (Germany), the Dolomites (Italy), the Eiffel Tower (France), Everest (Nepal), the Great Wall (China), Iguazu Falls (Brazil), Kiyomizudera (Kiyomizu Temple) (Japan), Los Glaciares National Park (Argentina), the Pyramids (Egypt), Red Fort Complex (India), Sagrada Familia (Spain), Saint Petersburg (Russia), Wat Sri Swai (Thailand)

2.2.5 教材・教具

授業実践する上で、ピクチャーカード、ゲーム用教材等、及び世界遺産の画像は事前に準備した。各種ゲームの活動(表3)を円滑にするためにゲーム用教材は必要である。

1. ピクチャーカード
2. ゲーム用教材等
3. 世界遺産の画像

2.2.6 評価規準

- (1) 行きたい国の言い方がわかるか。(外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること)
- (2) 世界遺産と想定して「行きたい国」を考えているか。(言語と文化)
- (3) 児童自身が「行きたい国」を積極的に発表したか。(コミュニケーションを図ろうとする態度の育成)

2.2.7 参加者

児童の参加者は、6年1組と2組で計65名であった。

2.2.8 授業実施日

授業実施日は、2012年10月2日、10月9日、10月16日、及び10月23日の計4回である。

2.2.9 4時間の指導計画

4時間構成の中で、最初は、国旗と国の名前が一致させながら、ねらいである「行きたい国の言い方」を指導し

た。そして、世界遺産の画像を提示しながら、国名を理解して音声的に練習をさせる。即ち、「聞くこと」から「話すこと（言うこと）」をねらいとし、最終的に児童が行きたい国を積極的に表現できるようにした（表2）。

表2 指導計画

時数	指導内容	指導上の留意点
1	国名と「行きたい国」の言い方を聞き取る。	「聞くこと」をねらいとする。
2	国名と「行きたい国」の言い方を聞き取り、話せる（言える）ようにする。	「聞くこと」と「話すこと（言うこと）」をねらいとする。
3	世界遺産を想定しながら、国名と「行きたい国」の言い方を聞き取り、話せる（言える）ようにする。	世界遺産を想定しながら、「話すこと（言うこと）」をねらいとする。
4	児童が「行きたい国」を発表する。	自分が考えた「行きたい国」を発表できるようにするために練習させる。

2.2.10 各種活動（ゲーム・歌）

指導内容としては、全指導時間にゲームの活動を取り入れた。その際、話題（言語材料や目標文も含む）を扱いつつながら、1時間目は「聞くこと」を中心として、2時間目以降は「聞くこと」から「話すこと（言うこと）」をねらいとするゲームを試みた。また、全員が最後まで活動できるゲームの活動を指向した。即ち、途中で子どもが脱落するようなゲームはすべきではないことに配慮した。児童ひとり一人が最後まで積極的にゲームに参加して、「ゲームをして楽しかった」という満足感を持てるようにするためである（表3）（石濱, 1999）。歌の活動に関しては、「行きたい国」とは関連はないが、いろいろな活動をするために授業の雰囲気を変える側面から、“Playground”を採用した（石濱, 1999）。

表3 ゲームの活動の事例

第1時	第2時	第3時	第4時
・はえたたきゲーム	・カルタゲーム ・パズルゲーム	・マッチングゲーム	・ジャンケンゲーム (インフォメーションギャップゲーム)

2.2.11 授業展開例

授業を展開する際、学級担任、ALT、及び児童にも容易に取り組めるように「授業の固定化」を推進した（石濱, 2010；石濱・渡邊, 2013）。外国語活動の授業を展開する際、子どもが「(内容が) わかれば、楽しく」主体的に活動するという指導原理を基にした、「① あいさつ → ② 復習 → ③ モデルの提示 → ④ オーラル・ワーク（チャンツも含む） → ⑤ グループ・ワーク、ペア・ワーク → ⑥ ゲームの活動 → ⑦ 歌の活動 → ⑧ 発表 → ⑨ 別れの言葉」という授業の枠組みである。指導の中で、さまざまな形態の反復（繰り返し）練習を多く取り入れながら、主に音声を重視して「ねらい」とする話題や言語材料の定着を図ろうとした（石濱・藤田, 2008；石濱・渡邊, 2013）。最終的に、児童に自信を持って自分が「行きたい国」を表現させたいからである。

1時間の授業の中で、順々に①から⑨までの活動を絡めながら、本時のねらいを実現させていく。③の「モデルの提示」は重要な活動である。教員がねらいに基づく言語材料を提示する際、児童がその提示を手がかりに本時の学習内容を類推する。一つに類推させるための「場面づくり」をする。児童に本時のねらいを考えさせながら、言葉の気づきをさせたいためである。従って、児童は学習内容を理解し、ゲームなどの活動等に主体的に取り組むことができる。授業の編成は、徐々に「オーラル・ワーク」から「グループ・ワーク」や「ペア・ワーク」のようなスモールグループに編成して練習をさせることも必要である。その結果、「発表」段階では、児童は学習した言語項目を用いながら自分の思いや考えを伝えようとする。また、4時間の単元構成内の活動内容に関して、「聞くこと」と「話すこと（言うこと）」の活動の割合をおおよそ図1のように構成した。

時数	第1時	第2時	第3時	第4時
活動内容	「聞くこと」		「話すこと(言うこと)」	学習内容の発表

図1 単元構成内の活動内容（特に「聞くこと」と「話すこと（言うこと）」の活動の割合）

2.2.12 「気づき」のためのモデル例

毎時間、学級担任、ALT、及び石濱が③の「モデル」を提示した。児童にその提示を手がかりに本時の学習内容を類推させて、どのような活動をするのか考えさせるためである。毎時間モデルを提示してから、各種活動を実施させる。「行きたい国」の1時間目から4時間目のモデルは下記のとおりである。3時間目と4時間目には、世界遺産を取り入れた指導を実施した（付録1 指導案の指導過程例）。

1) 1時間目のモデル： 旅行代理店での会話

At the Itoigawa Travel Agency

Staff: Can I help you?

Customer: Yes.

Staff: Where do you want to go?

Customer: I want to go to France.

Staff: Here you are.

Customer: Thank you.

2) 2時間目のモデル： 図書館での会話

A: Hello.

B: Hello.

A: There are a lot of national flags. Where do you want to go?

B: I want to go to France.

A: Why do you want to go there (to France)?

B: Because I go up the Eiffel Tower. How about you?

A: I want to go to Italy.

B: Why do you want to go there (to Italy)?

A: Because I like pizza

3) 3時間目と4時間目のモデル： 世界遺産を想定した会話

We are going to talk about the World heritages.

A: Where do you want to go?

B: I want to go to Japan.

A: Why?

B: I want to see Kiyomizu Temple.

3 児童の自己評価による授業実践の省察

3.1 児童の自己評価

第1時間目と第4時間目に、「英語ふりかえりカード」を用いて児童の情意面を測定・確認して、今回の授業実践を評価する。自己評価で使用する「英語ふりかえりカード」は、理解面（「難易度」「わかること」）、興味・関心面（「楽しさ」）、技能面（「聞くこと」「話すこと（言うこと）」）、自由記述欄（「わかったこと」「よかったこと」及び「難しかったこと」などに関する感想）で構成されている（石濱・藤田，2008）。そして、理解面、興味・関心面、技能面は、五肢選択法で児童が最も気持ちに合っていると思われる箇所に○をつけて回答させた。そして、第1回目と第4回目の自己評価で、児童の情意面がどのように変容したかについて検討した（表4）。更に、自由記述をIBM SPSS Text Analytics for Surveys Ver. 4を用いて、児童の自由記述の感想をカテゴリ化して、その関連性を分析しようと試みた。

表4 英語(えいご)ふりかえりカードの例

5. 「行きたい国」の内容を、進(すす)んで話(はな)そうとしましたか。
- 1) よく話せた
 - 2) だいたい話せた
 - 3) どちらでもない
 - 4) あまり話せなかった
 - 5) 話せなかった

3.2 自己評価の結果と考察

児童の自己評価の5つの観点(付録2)から、「楽しさ」(表9, 表10)と「聞くこと」(表11, 表12)は第1回目と第4回目の平均に有意差はない(「楽しさ」($F(1, 64) = .180, ns$), 「聞くこと」($F(1, 64) = .180, ns$))。「楽しさ」や「聞くこと」に関して、児童は第1回目から肯定的にとらえていることが推察できるであろう。「難度」(表5, 表6), 「理解」(表7, 表8), 及び「話すこと」(表13, 表14)は第1回目と第4回で平均において有意差がみられた(「難度」($F(1, 64) = 24.968, p < .01, \text{partial } \eta^2 = .281$), 「理解」($F(1, 63) = 19.415, p < .01, \text{partial } \eta^2 = .236$), 及び「話すこと」($F(1, 64) = 30.954, p < .01, \text{partial } \eta^2 = .326$))。第1回目から4回目になり、児童には言語項目が易しくなったと考えている。また、その内容も理解できたであろう。更に、児童が、今回の「行きたい国」を言えるようになったとみなしている。テキストマイニングの結果(付録3)からも、第1回目の図から児童は国名を言うことは難しいと述べているが、第4回目では、児童は英語で国名を言うこと、即ち、「行きたい国」の表現を理解して、言えるようになったと捉えている。

4 教育的示唆と今後の課題

今回、児童に「行きたい国」を表現させたいために、世界遺産の画像を取り入れながら授業実践を試みた。授業展開の固定化の中に、「気づき」の一つの方法として世界遺産の画像を取り入れて、授業展開を試みたことは意義がある。話題に沿ってさまざまな「気づき」をさせながら、児童が与えられた言語材料を言えるようにすればよい。

この実践は、「行きたい国」についての実践である。『Hi, friends!1・2』に取り上げられている話題について、授業の固定化を図りながら、その話題の応じた教材・教具を開発して授業実践をしていきたい。更に、児童の情意面ばかりでなく、実際に使用している言語項目・言語材料がどのくらい定着して表現していくかを検証していき、よりよい指導のあり方を提案していきたい。

引用文献

- 石濱博之(1999). 「「楽しさ」を求めて 効果的なゲームと歌の活動をとおして」 『英語教育』10月号, 23-25. 東京: 大修館書店.
- 石濱博之・藤田英志(2008). 『「だれでもできる」「役立つ」「楽しい」英語活動—学級担任主体の英語活動の取り組み—』『上越教育大学・糸魚川市立西海小学校報告書』, 全53頁.
- 石濱博之(2010). 「外国語活動(英語活動)の「授業づくり」—授業の指導体系の固定を目指して—」『愛知県立大学平成21年度教育・研究活性化推進費研究成果報告書』, 51-84.
- 石濱博之・渡邊陽介(2013). 「外国語活動(英語活動)に「お寿司屋さんごっこ」を導入した授業の展開とその効果—「ごっこ遊び」で扱った寿司英語と扱わなかった寿司英語の学習成果に焦点をあてて—」, *JES Journal*, 13, 52-67.
- 文部科学省(2008). 『小学校学習指導要領解説』東京: 東洋館出版.
- 文部科学省(2012). 『Hi, friends!1』東京: 東京書籍.
- 文部科学省(2012). 『Hi, friends!2』東京: 東京書籍.
- 文部科学省(2012). 『Hi, friends!2 指導編』東京: 東京書籍.

付録1 指導過程の例

過程	学習活動	指導上の留意点
導入 3分	(1) あいさつをする。 T: Hello, everyone. C: Hello, Hiro sensei. T: How are you? C: I'm fine, thank you. And you? T: I'm fine, too, thank you. T: How is the weather today? C: It is fine. T: What's the date today? C: It's_____ T: What day is it today? C: It is_____.	<ul style="list-style-type: none"> ・児童と元気よくやりとりをする。 ・学級担任とALTで児童に問いかける。
展開 32分	(2) モデルを見る。 We are going to talk about the World heritages. A: Where do you want to go? B: I want to go to Japan. A: Why? B: I want to see Kiyomizu Temple. (3) オーラルワークをする。 A: Where do you want to go? B: I want to go to France. (4) グループワークをする。 A: Where do you want to go? B: I want to go to France. (5) “Playground”の歌を歌う。 ・モデルを見る。 ・やってみる。 (6) じゃんけんゲームをする。 A: Where do you want to go? B: I want to go to France. (7) ペアワークをする。 A: Where do you want to go? B: I want to go to France.	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のねらいの表現を類推させる。 ・世界遺産について話している場面である。 ・世界遺産を見ながら、その国に行きたいことを反復練習させる。 ・「問の仕方」と「答え方」の2つの表現を、別々に練習させてもよい。 ・5つのグループに分かれる。 グループで問答をする。 ・スモールカードをめくりながら、該当する国を問答する。 ・意味を動作で表すように示す。 ・「じゃんけんゲーム」は「話すこと」を目指すゲームである。 ・5枚のカードを持つ。 ・行きたい国を決定させる。 ・4つの列になり、ペアを変える。 ・多くの児童とやりとりをする。
整理 10分	(8) 復習をする。 A: Where do you want to go? B: I want to go to France. (9) “Good-by to you”の歌を歌う (10) 別れの言葉をいう。 (11) 自己評価をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の発表を促す。 ・全員で歌う。 ・元気よく別れの言葉を言い合う。

付録2 情意面の結果

表5 難度の記述統計量

回数	<i>M</i>	<i>S.D.</i>	<i>N</i>
1回目	3.68	1.174	65
4回目	4.38	.804	65

表6 難度の一元配置の分散分析結果

<i>S.V.</i>	タイプⅢ <i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>Sig.</i>	<i>partial</i> η^2
回数	16.277	1	16.277	24.968	.000	.281
誤差 (回数)	41.723	64	.652			

表7 理解の記述統計量

回数	<i>M</i>	<i>S.D.</i>	<i>N</i>
1回目	4.33	.691	64
4回目	4.77	.496	64

表8 理解の一元配置分散分析結果

<i>S.V.</i>	タイプⅢ <i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>Sig.</i>	<i>partial</i> η^2
回数	6.125	1	6.125	19.415	.000	.236
誤差 (回数)	19.875	63	.315			

表9 楽しさの記述統計量

回数	<i>M</i>	<i>S.D.</i>	<i>N</i>
1回目	4.74	.477	65
4回目	4.71	.723	65

表10 楽しさの一元配置分散分析結果

<i>S.V.</i>	タイプⅢ <i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>Sig.</i>	<i>partial</i> η^2
回数	.031	1	.031	.180	.673	.003
誤差 (回数)	10.969	64	.171			

表11 聞くことの記述統計量

回数	<i>M</i>	<i>S.D.</i>	<i>N</i>
1回目	4.74	.477	65
4回目	4.82	.391	65

表12 聞くことの一元配置分散分析結果

<i>S.V.</i>	タイプⅢ <i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>Sig.</i>	<i>partial</i> η^2
回数	.031	1	.031	.180	.673	.003
誤差 (回数)	10.969	64	.171			

表13 話すことの記述統計量

回数	<i>M</i>	<i>S.D.</i>	<i>N</i>
1回目	3.63	1.257	65
4回目	4.49	.753	65

表14 話すことの一元配置分散分析結果

S.V.	タイプⅢ SS	df	MS	F	Sig.	partial η^2
回数	24.123	1	24.123	30.954	.000	.326
誤差 (回数)	49.877	64	.779			

付録3 自由記述のテキスト分析結果

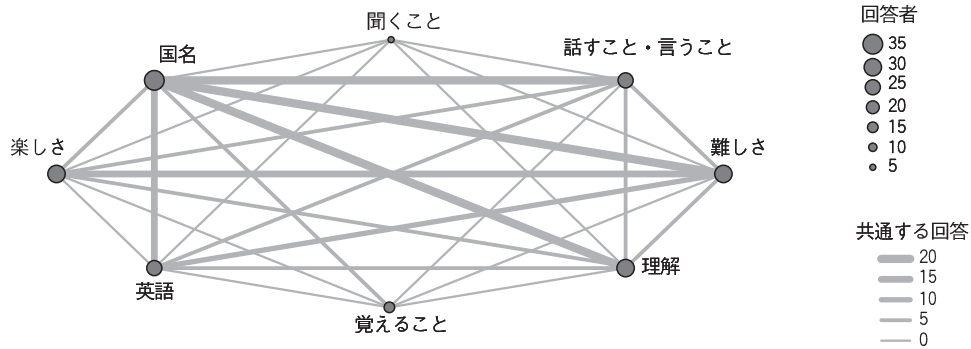


図2 1回目のカテゴリの関連性

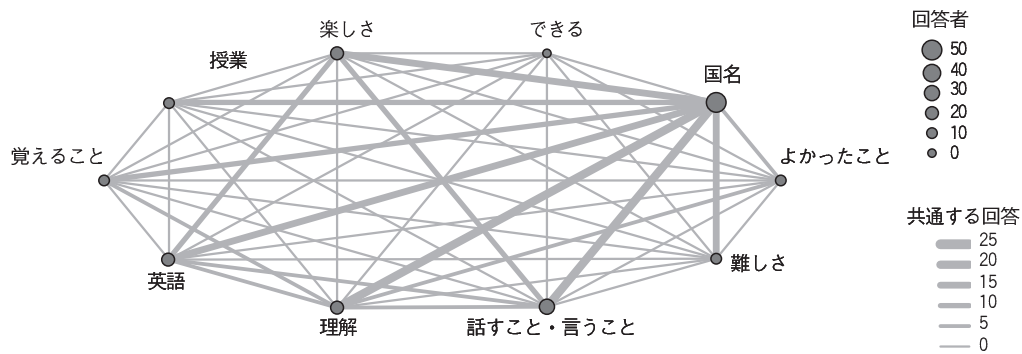


図3 4回目のカテゴリの関連性

A “Foreign Language Activities” Lesson for Introducing World Heritage Sites into the Topic “Countries that We Want to Visit.”

Hiroyuki ISHIHAMA* • Fujishige SOMEYA**

ABSTRACT

Foreign language activities have been compulsory in Japanese elementary schools since the 2011 academic year. The overall objectives are to form the foundation of pupils' communication abilities through foreign languages, while developing an understanding of languages and cultures through various experiences, fostering a positive attitude toward communication, and familiarizing pupils with the sounds and basic expressions of foreign languages. To accomplish these aims, the texts for foreign language activities, “Hi, friends!1” and “Hi, friends!2”, have been distributed to all the national and public elementary schools by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology since April 2012. “Hi, friends! 1” is used for the fifth graders and “Hi, friends!2” is also used for the sixth graders. The topic of Lesson 5 in “Hi, friends!2” is “Let's go to Italy.” In this lesson, we aimed to encourage the children to express which places they wanted to visit, by introducing world heritages sites into Lesson 5. After the lessons, we examined the way of teaching English to children from the viewpoint of the change in their attitude toward communication through their self-evaluations. As a result, we concluded that they were able to talk about where they wanted to go.

As the children conveyed the places they want to visit to each other, we developed a way to teach that moved the emphasis in our lessons from “listening” to “speaking”. As a consequence, the children were able to convey the places they wanted to visit to each other with confidence.

* Humanities and Social Studies Education

** Joetsu University of Education (Master's Program)